

# 「天降大任」「出類拔萃」「不辱君命」： 指導者の歴史責任感・使命感（上）

夏

剛

## 目 次

1. 「天降大任於斯人」：孟子の氣宇軒昂
2. 「出類拔萃之輩」：指導者の基礎的な条件
3. 慈父の自負・無情と有情・「龍種」と「跳蚤」<sup>のみ</sup>
4. 「自強・自卑」の複合体；「礼・兵」の極意
5. 「最後の吼声」の決意・底意

## 1. 「天降大任於斯人」：孟子の氣宇軒昂

同系列の前の論考<sup>1)</sup>では死生観を軸に当代日中の指導者の時代緊迫感を比較したが、此からは栄辱観を軸に同じ対象の歴史責任感を考察して行きたい。世紀末の日本の慢性安逸死の危険を警告した前回の到達点は、孟子の「人恒過，然後能改，困於心，衡於慮，而後作，徵於色，發於声，而後喻。入則無法家執士，出則無敵国外患者，国衡亡。然後知生於憂患，死於安樂也」だが、彼の先哲のより積極的な言葉を今回の思索の出発点としよう。

中国の知識人の間に有名な此の命題は、「天将降大任於斯人也，必先苦其心志，勞其筋骨，餓其体膚，空乏其身，行誨亂其所為，所以動心忍性，曾益其所不能」（天が大任を此の人に与えようとする時は、必ず其の精神を苦しませ、其の筋骨を疲労させ、其の肉体を餓えさせ、其の身を貧乏させ、其の行なう事為す事も、意に反する様<sup>よう</sup>にしてしまう。此を以て其の心を發憤させ、其の本性を堅忍な物にし、曾て無い能力を増す為だ）、と言う。

窮境に陥ってから反発する前者の受動性に対し、受難を天の試練と見る後者は前向き<sup>イメー</sup>の発想だ。儒教は「柔弱な小人」（「儒」の字形の原義）の固定観念・形象<sup>イメージ</sup>を持つが、儒教の先哲・孟子は「氣宇壮大」の字面の通り、「氣」（意気・正気）、「宇」（宇宙・「<sup>グローバル</sup>広宇」意識）、「壮」（勇壮）・「大」（雄大）が特色だ。「氣位。心の持ち方。見識。度量。器宇」を表わす「氣宇」

(『角川大宇源』)は、彼の関心や論説の鍵言葉にも成る。

「氣宇壮大」と隣接する中国の成語は、「氣勢宏大」「氣宇軒昂」が思い当たるが、後者の「氣宇」は氣概と儀表の両方を表わすので、何れも微妙に違う。「軒昂」は『広辞苑』では、「氣持ちがふるいたつさま。「意氣 - 」の一義だが、『角川大宇源』の解では、「①高く上がるさま。〔柳宗元・招海賈文〕“舟航軒昂兮”②意気の盛んなさま。〔吳志・孫堅伝〕“軒昂自高”③物事の盛んなさま。〔水滸伝二〕を言う(『角川大宇源』)。

中国の『辞海』の同じ項は、「①高揚貌；飛拳貌。柳宗元《招海賈文》：“舟航軒昂兮，上下飄鼓。”韓愈《聽穎師彈琴》詩：“劃然變軒昂，勇士赴敵場。”②形容氣度不凡。如：人物軒昂，氣宇軒昂。③驕矜貌。《三国志・吳志・孫堅伝》：“卓（董卓）受任無功，応召稽留，而軒昂自高。”と成る。上記の日本風の講釈と違って、①の「高揚・飛拳」は物心両面に涉る表現機能が有り、「軒昂自高」は高慢・自惚れうぬぼという貶す意味なのだ。

此の2点は中国語の幅や複雑さの現われに思えるが、日本の辞書に出ない「不凡」(非凡)の語義は、中国的な心性の凸型・鋭角の一面を大写しし出す。「氣宇軒昂」は「精神飽滿，氣概不凡」<sup>2)</sup>の形容に使うが、「飽滿」にも両国の文化溝が見られる。此の語彙は日本語で「ほう(ぼう)まん」と読み、単に「飽きるまで食って腹のふくれること」の意(『広辞苑』)だが、中国語では「豊滿・充實」「旺盛・元氣一杯」の有様を表わす。

「肥滿」の美化語・「發福」と同様に、中国語の「飽滿」は褒詞ほうしなのだ。漢字の形・声の表徴性あかしの証に成ろうが、「褒詞」の「褒」は「飽」と同音で、反対語の「貶詞」(貶す言葉)の「貶」は「扁」と同音で、字形の「貝・乏」は「金欠」の含みが有る(貝は貨幣の祖型)。因みに、通貨の切り下げ・切り上げは「貶値・昇値」と言うが、通貨の堅調を表わす「堅挺」(軟調 = 「疲軟」)にも、「軒昂・飽滿」の共通した強盛志向が窺える。

哲学者・上山春平は日本の「凹型文化」の理念の依拠を、老子の「谷神・玄牝之門・天地之根」に見出した<sup>3)</sup>。確かに熟語の「虚懷若谷」(虚心坦懐)の様に、女陰や子宮に似た谷は凹みの故に価値の生成・蓄積が出来るが、老子の雌伏・枯淡と対照的に、『莊子』の冒頭の鯤鵬の衝天は、雄飛・躍動の指向を見せる。其の爆発的な上昇や凄厲な圧伏の勢いは、別の処の大樹の屹立の比喻と合わせて、陽物勃起の「堅挺」願望の發露にも映る。

老子の「上善若水」「天下之至柔，馳聘天下之至堅」の逆説に対して、孟子は「至大至剛」「塞滿天地之間」の力・美を理想としたが、此の拡張・飽滿志向も陽性の衝動が根底に有ろう。道家の両巨頭の明暗の対照は、儒家の両先師の場合も同じだ。『論語』の冒頭の「学而時習之」「有朋自遠方来」の悦びは、孔子の「文靜」と待ちの姿勢ものしずかを浮き彫りにしたが、『孟子』の冒頭の梁惠王との遣り取りは、「不甘寂寞」の有為精神を示した。

「氣(器)宇軒昂」の用例には、『三国演義』第43回・『諸葛亮舌戰群儒 魯子敬力排衆議』の中の「張昭等見孔明豐神飄洒，器宇軒昂，料道此人必來遊説」が有る。此の件は立間祥介に

「天降大任」「出類拔萃」「不辱君命」：指導者の歴史責任感・使命感（上）（夏）

由って、「張昭らは孔明の飄然とした風貌、天をも突かん自信のほどを見てとって、此の男、我等を説き伏せに参ったなと思った」と訳された<sup>4)</sup>。下線の処は底意を掴めた好訳だが、『孟子』の書出しも儀礼的な懇談ではなく、遊説・説伏の場面である。

「孟子見梁惠王。王曰：“叟！不遠千里而來，亦將有以利吾國乎？”孟子對曰：“王！何必言利？唯有仁義而已矣。”」（孟子が梁の惠王と会見した。王が言うには、「先生は千里もの道を厭わず遙々と来られたからには、亦も（他の遊説者たちと同じ様に）我が国の為利益を求めて下さるお心算つもりでしょうね。」孟子は対して答えた。「王様よ、何も利益、利益ばかりを仰言おっしゃる事は有りません。〔治世に〕大事なものは、唯仁義のみです。〕」

司馬遷は惠王の此の質問を読む度に情け無く感じ、利こそ乱の端緒だと嘆息した。『史記孟子・荀卿列伝』に拠ると、孟子は孔子の孫・子思の門人から学問を受け、孔子の道を極めた後に鄒国（山東・鄒県）を出て齊の宣王に仕えたが、意見が採択されなかった。魏の都・大梁（河南・開封）に赴いたが、惠王も其の進言を実行しなかった。何処でも相手にされないで郷里に帰り、『詩経』『書経』の整理や孔子の学説の普及に専念した。

太史公曰く：孟子は儒家・墨家の古典を取り集め、礼義の大綱を明らかにし、惠王の利を望む緒を断ち切り、過去の世々の興亡を説き連ねた。彼の記述の通り、其の頃、秦が商鞅を任用し富国強兵を進め、楚や魏が呉起を信任し戦に勝ち敵を弱くし、齊が孫子や田忌を頼んで勢力を強めた。各国は合縦・連衡の駆け引きや優位の争奪に熱中したから、堯・舜と夏・殷・周三代の聖王の徳を説く孟子の主張は、迂遠で非現実的だとされたわけだ。

5百年余り後の諸葛亮の遊説も抗魏同盟の結成が目的だから、惠王の思い込みと反応は無理も無い。孔明は利害関係を巡る分析で呉の面々を明快に説得できたが、そんな即物的な意識や直線的な方策を持たぬ孟子は、天下を狙う権力者と咬み合わないはずだ。礼義の大綱が功利の対抗に対抗し辛いつら事も、儒家の王道 v s . 列強の覇道の図式と共に、今日的な意味を持つが、朱子曰く、「抜本塞源而救其弊，此聖賢之心也。」（『孟子集注』）

『左伝』が出典の「抜本塞源」は、「本の根を抜き取り、水源を塞ぐ。原因に成るものを徹底的に取り除く」（『角川大辞源』）意だが、聖賢の離見の見と君主の利権の見は懸け離れる物だ。孟子の「迂遠」は「遠交近攻」の戦略と通じて、「欲速則不達」（速くしようと欲すれば却って到達せぬ。急げば廻れ）の迂回だが、「三十三天上発想，得題中第一義，压倒天下才人」（清の文学者・廖燕の言）の意では、高遠・広遠と言うべきだ。

『莊子』の劈頭の鯤鵬は9万里も昇り、北冥（冥＝暗い海）から南冥へ飛ぶが、同じ『内篇』を結ぶ『応帝王』の掉尾は、北海と南海の帝が中央の帝・混沌の顔に視・聴・食・息を司る「七竅（穴）」を開け、好意が災いして死なせたという寓話だ。其の理解され難い大智の悲劇の反面、中国語の「開竅」は肯定的な言葉（①釈然とする。②〔子供が〕物が解り始める）だ。中原の王に対する孟子の説教も、大乘的な開眼・開悟の試みだった。

個人崇拜への反対を表明した毛沢東は、「偉大的導師，偉大的領袖，偉大的統帥，偉大的舵手」の称呼の中で，最初の方だけは認めようと言った。教員の経歴が有るから teacher が相応しいとの事だが，今の中国語で（特に院生の）指導教師を表わす「導師」は，「仏道を説いて衆生を悟りに導く者の意で，仏・菩薩の敬称」（『広辞苑』）から「領導人」に転義したので，「領袖・舵手」と leader（導き手）の意味を共有する。

「導師」こそ究極の崇拜語に成るが，此の尊称に含まれた教育・宗教の両面は，儒（道）家・儒（道）教の家・教と符合する。形而上の高次から君主を開悟に導く孟子の「開導」は，『莊子・内篇』の鯤鵬衝天・「帝王開竅」の首尾と呼応する。滔々たる大河・蕩々たる乾坤じみた言説の風格も，莊子の豊饒・茫洋と通じ老子・孔子の濃縮・含蓄と対極を成すが，其の鮮烈な思弁と「思・弁」は，『論語』の字面通りの論理・言語を兼ねる。

徳が有れば友が自ずと遠方から来るといふ孔子の構えと逆に，孟子は諸国を廻り徳の賛同を得ようとした。但し，孔子も象牙の塔に閉じ籠もる学究ではなく，同じ外向・外交的な一面を持ち，政治への関与や遊説の経験が有った。『論語』の冒頭の「学而時習之，不亦説乎？」（学んでは時に復習する，如何にも楽しい事であろう）の中の「説」は，字形が類似の「悦」の意味だが，論説・説得に喜悦を感じる点は孔・孟・老・荘は一緒だ。

『孟子』では「説・悦」は分化するに至ったが，「至大至剛」と同じ章に出た「我知言」は，『論語』を結ぶ「不知言，無以知人也」（言葉を知らぬと，人を知る事は出来ぬ）の文脈を受け継いでいる。儒家と道家の間や儒家の内部の相互内包・補完は此処にも見られるが，孟子は先哲より更に進んで，言を以て仁を説くだけでなく，言を以て人を制し治世に寄与しようとした（「知・制・治」は俱に z h i ，「人・仁」と同音の r e n ）。

## 2. 「出類拔萃之輩」：指導者の基礎的な条件

日本語に無い「善弁」は，「（真意・動向等の）弁別が得意」「弁論が得意」の両義だが，孔子の「知言」の旨たる前者と共に，孟子は後者の能弁力も備えていた。最近訪米した朱鎔基総理は力強い自信と説得に因り，「中国の能動詞」と礼賛された<sup>5)</sup>が，鮮烈な氣勢と修辞に由る中国流の自己主張の先駆の一人が孟子だ。諸葛亮の群儒と舌戦する事や魯肅<sup>つと</sup>の力めて衆議を排す事も其の延長に在るが，此の二つの業とも日本の政治家の苦手だ。

中国では豊富は絶対的な善・価値とされ貧乏は罪と視られ，「感情飽満」は文学表現の理想と成るが，小淵首相が自嘲した「語彙貧乏」<sup>ボキャブリー</sup>は，左様な見地から観れば格好が悪い。朱首相の代名詞なる「能動詞」（可能助動詞）は，我が辞書には「不可能」は無しという拿破崙<sup>ナポレオン</sup>の豪語を連想させるが，説得の姿勢の貧弱は「疲軟」の不振・不能と重なる。更に言えば，陰柔の特色の強い日本語にも，「冷感（不感症）」や矮小化の傾向が儘有る。

「天降大任」「出類拔萃」「不辱君命」：指導者の歴史責任感・使命感(上)(夏)

例の「軒昂・興亡」の接点に在る「興旺」(隆盛)は、『広辞苑』にも『角川大辞源』にも出ない。孟子と梁恵王のずれと絡むが、concreteに当る準和製漢語の「具体」は、中国の古語では全体の具備を表わしたのだ。思考や着想が現実の形を取る具体性は孟子にも有ったが、原典の「具体而微」([聖人の]全体を具備しているが、只[聖人に比べて]微小なのだ)は、孔門の冉牛・閔子・顔淵に対する孟子の弟子・公孫丑の評だ。

個別の物事の特異性への関心に収斂し、中国的な全体志向を消した「具体」には、日本的な「縮み」志向が窺われるが、根元から原義の氣勢を削ぐ去勢は、日本に於ける漢語の変容の一つの様相だ。此は変な「抜本」の変種とも言えようが、「抜本」は日本語で「抜き書きした本」の意にも成る(『角川大辞源』)。類義の和製漢語・「抜粹」は、同じ『孟子・公孫丑上』の「出<sub>レ</sub>於其類<sub>一</sub>、抜<sub>レ</sub>乎其萃<sub>一</sub>」が出典の「拔萃」(抜群)の変形だ。

毛沢東はニクソンとの会見で其の『6つの危機』を誉めたが、後者は10年後の72年に『指導者たち』<sup>6)</sup>を出した。「未来の指導者に捧げる」との題辞で始まり、チャーチル、ドゴール、マッカーサー、吉田茂、周恩来等を取り上げた此の「現代世界を創った人々の横顔と回想」(副題)は、中国で『領導人』『出類拔萃之輩』と訳されたが、成語の「出類拔萃」に由る意識は、抜群・非凡を指導者の条件とする伝統的な理念を物語っている。

『孟子』の中の「出於其類、抜乎其萃」は、孔門の高弟・有若の言葉である。彼は走る獣の中の麒麟、飛ぶ鳥の中の鳳凰、丘に対する泰山、水溜まりに対する大河や海、民衆に対する聖人を其の例に挙げ、「自生民以来、未有盛於孔子也」(人類始まって以来、孔子より盛んな偉人は無い)、という師への礼賛を展開した。此处で省略された「盛」の修飾語は、一般的に「徳」と考えられるが、「出類拔萃之輩」の条件には「才」も欠かせぬ。

諸葛亮は蒋琬を後継者に指名したが、劉備に仕えて討魏戦争で兵糧供給を司った此の男は、『三国志・蜀志・蒋琬伝』に拠ると、「出類拔萃、処群僚之右」の人物だ。蜀の君主の首席補佐に抜擢されたのは、右に出る者が無い様な人徳・才知の故だろう。蜀(四川)の人・鄧小平が蒋琬と同じ湖南の人・朱鎔基を、新領袖・江沢民の首席補佐に起用したのも、似た理由が考えられるが、三国時代の世代交代と蜀の国力の後退は警世の鏡に成る。

蒋琬は諸葛亮の他界の12年後に逝ったが、孔明は其の後継者・費禕まで指名して置いた。当時の蜀の人々は諸葛・蒋・費と董允を「四相・四英」と称した<sup>7)</sup>が、後の3人の「一代不如一代」(次の代は前の代に及ばぬ)は明らかだ。尤も、孔明が敗将・馬謖を斬ろうとした時に蒋琬が諫めたが、「壮士断腕」の勇氣を持つ朱総理は前任者たちに勝ろう。毛が周を後継者にしなかったのは、和を尊び首切りの決断が鈍い点も有ったと言う<sup>8)</sup>。

「出類拔萃」の「萃」は、「①草の生えるさま。②あつまる。人や物事が集まる。あつめる。また、あつまり。③やつれる。④くるしむ。⑤とどまる。⑥総攻撃する。⑦易<sub>えき</sub>の六十四卦の一。☷☵。坤下兌上。名称を表す意味は、聚集(あつまる)」の多義を持ち、字形は「意符の

艸(くさ)と、音符の萃<sup>ソツ</sup> <sup>スイ</sup>(よりあつまるの意=帥<sup>スイ</sup>)とから成る。草の集まる所。くさむらの意。ひいて、“あつまる”意に用いる。(『角川大辞源』)

「出類拔萃」は草叢から抜き出ている様を表わし、同じ②の用例に『左伝』の「楚師方壯，若萃<sub>二</sub>於我<sub>一</sub>，我師必盡」も有るが、「導師・統帥」の「師・帥」が「萃」の項に出るのは興味深い。「聖人=精粹」「民衆=萃」の図式は、「草民」の発想と同根に思える。民を詰まらぬ草芥と同一視する差別の意から、此の古語は歴史の護美箱に入れられたが、「草叢。藪」「民間。在野」を表わす「草莽」は、今も中性の言葉として使われている。

『角川大辞源』の該当の成句は、『孟子・万章下』の「在<sub>レ</sub>国曰<sub>二</sub>市井之臣<sub>一</sub>，在<sub>レ</sub>野曰<sub>二</sub>草莽之臣<sub>一</sub>」が出典の「草莽之臣」(=官に仕えず，民間にある人。在野の人。庶民)だけだが，中国では「草莽英雄」(民間の英雄)の方が使用頻度が高い。体制から「草寇・草賊」と断罪された農民造反軍等を肯定し美化する場合は，好く此の4字が用いられる。国民党政権に長く「匪賊」と呼ばれていた中共軍も，「草莽英雄」の色彩を帯びている。

国・共両党が「匪賊」として罵り合う関係は，例の中米頂峰会談でも話題に成った。ニクソンは悪戯<sup>みざけ</sup>で自分を「匪賊」と呼んだ処，貴方を打倒したら我々は友人が居なくなってしまう，と毛沢東は言った。其処でニクソンは，次の言葉で会談を締め括った。「貴方は非常に貧困な家庭に生まれながら，世界で最も人口の多い，偉大な国家の最高指導者に成られた。私も非常に貧困な家庭の出身で，非常に偉大な国の最高指導者に成りました。」

彼曰く，歴史が此の2人を結び付けました；異なった哲学を持ちつつ，共に地に足が着き民衆から生まれた我々が，中・米と世界に此から長年に亘って寄与する突破口を作れるかどうか，此が問題でしょう；其の為に私たちは此処に来たのです，と<sup>9)</sup>。曾て84歳のチャーチルと会った彼は，此が最後と判っていたので，米国と世界の数百万人は貴方に感謝しています，と別れ際に述べた<sup>10)</sup>が，79歳の毛に対しても一期一会の心算<sup>つもり</sup>だったか。

其の「動情」(①激情に駆られる。②敬慕の情を起す)は，私的・詩的な感動・感傷を超えて，外交の本質の一端を窺わせる。ニクソンは米国外交官や国民党高官の言を引き，外交家・周恩来の本心を見せまい役者の本質に触れた<sup>11)</sup>。集団や国家間の交渉は利害の対立の為に，打打発止の応酬も虚々実々の駆け引きも，場合に因っては欺瞞も必要だが，本音・本気のぶつかり合いが無いと，不毛の探り合いや上辺<sup>うわべ</sup>の付き合いに止まりがちだ。

ニクソンが言うには，指導者は権謀術数を用いなければ，大事に当って目的を達成できぬ場合が多いので，世論より先行しつつも世論が熟するのを待ち，手持ちカードの一部を隠す必要も有る。「真の政治家は，権謀の時と誠実の時を使い分けなければ成らない。権謀と誠実の政略を少なくとも千回繰返す事に由って，全権掌握は始めて可能に成る」，というドゴールの語録を引いた<sup>12)</sup>が，其の千回の旋回は共産党中国の政治手法でもある。

「工業戦線の旗幟」・大慶油田の気風 - 「做老实人，說老实话，办老实事」(素直な人に

「天降大任」「出類拔萃」「不辱君命」：指導者の歴史責任感・使命感（上）（夏）

成り、素直な事を言い、素直に事を行なう）は、毛沢東の建前と合致するが、重大な問題に関しては謙遜した事が無いという表白の通り、彼は「三老精神」を無条件で守り通したわけが無い。『毛主席語録』の第1章・『共産党』は、「政策と策略は党の生命である」という断言で結ぶが、彼は党内外・国内外の闘争に当って、謀略も辞さなかった。

彼は57年に先ず党員や民衆の直言を奨励したが、実際に異議を唱えた人々に突然鉄槌を下し、食言を「陽謀」と詭弁して憚らなかつた。其の「反右派闘争」を指揮した鄧小平は80年代に、偶数の年は改革・開放を推進し、奇数の年は保守的な緊縮に転じた<sup>13)</sup>。時に無駄な紆余曲折をもたらす様な揺れを必要な均衡操作に捉える劉少奇は、飛行進路の左寄り・右寄りの曲線に譬えたが、目的地を目指す目的意識と意志は始終一貫するわけだ。

毛沢東は政策を革命政党の全ての出発点、過程と帰着に帰し、中共の規約に記された最低綱領（社会主義の建設）・最高綱領（共産主義の実現）は、要の政策をも凌ぐ目標だ。ニクソンは周恩来を「今世紀の共産主義運動が生んだ最も頭脳明晰にして非情な人物」とし、其の「鼠に飛び掛かる猫の周到さ」を讃えた<sup>14)</sup>。白い猫でも黒い猫でも鼠を捕れる猫が良い猫だ、と鄧小平は結果主義を唱えたが、周の真髄・真価は正しく其の辺に在る。

「儒者の礼讓と革命家の非情な政治本能を併せ持った」周は、「行動計画を最後まで読み切った男の決断力を以て、敢然として事に当る事が出来たが、同時に温かい配慮、滲み出る人間味、絹の様な手触りを持つ人でもあった」<sup>15)</sup>。ニクソンに映った彼の二面性は、中国の指導者の礼（教）・兵（家）の2つの顔だ。此の国の治世・外交の伝統には、「先礼後兵」（先ず礼を尽くし、上手く行かぬ場合は強硬手段に訴える）の二刀流が有る。

50年代の或る極東担当米国務次官は、周恩来の魅力を十分に認めた上で、此まで自分の手で人を殺し、其の後煙草を銜えて悠々と現場を立ち去る様な事をした男なのだ、とニクソンに教えた<sup>16)</sup>。88年の日本の国会で、自民党幹部の委員長が共産党の指導者を「殺人者」と呼び、責任を問われて辞任させられた事が有るから、軽々しく論評できる問題ではないが、前回の論文で触れた若き蒋介石の暗殺行動に関する伝説と合わせて考えたい。

### 3. 慈父の自負・無情と有情・「龍種」と「跳蚤」<sup>のみ</sup>

周恩来はニクソンとの長時間の会談で、「提神」（精神を奮い立たせる。気付け）の為に、偶に煙草を一口だけ吸って、火が点いた儘で其を灰皿に置くのだった<sup>17)</sup>。歯が黒く染まった程の「煙鬼」・毛沢東と違って、煙草を敬遠する彼の習慣は広く知られている。従って上記の風説は、想像か比喩としか思えないが、現場に立ち会ったか否かは別として、内戦中の彼が党の叛徒への報復処刑を指揮した事は、英雄譚として公表された史実だ。

其の別働隊は「打狗隊」と自称したが、裏切りを処罰する執念は猫の特質でもある。12支の

動物に鼠が首席を据え猫が入らぬのは、鼠の嘘で猫が登録を損なった所為だ、と中国の寓話は言う。其の恨みで猫は鼠の天敵と成ったが、可愛い寵物の形象が強い猫の科に虎が居る事も面白い。「出類拔萃」の「萃」の「草叢・総攻撃する」は、彼の百獣の「帝王」の暗躍・闇討ちを連想させるが、指導者は必ず汚い部分が有るとニクソンは言う<sup>18)</sup>。

「萃」の関連語の「帥」は今では、俗に良い格好や瀟洒な様を表わす。軍師・孔明の瀟洒な統率と死滅の背中合わせを前に指摘したが、同じ前出の「量小非君子，無毒不丈夫」の両面も彼に有る。伝説的な「七擒七縱孟獲」の快拳・義拳は、大人・大国の気宇壮大（器の大きさ。懐の深さ）を存分に示したが、鼠を獲っては戻す猫の黒い面も見過ごせぬ。彼の南蛮の王に対する止めの一刺しは、草叢の中で行なった「山中賊」への総攻撃だ。

6回も釈放された孟獲は尚諦めず、烏戈国の君・兀突骨に応援を頼んだ。後者は「中国人多行詭計」と警戒しつつ進めたが、到頭罨に掛かり兵3万人が全滅した。天を衝く悪臭の中で谷間に焼死する場面を頂上から見下ろして、孔明は涙を零しながら嘆く。「吾雖有功於社稷，必損寿矣！」（儂は国の為の功勞とは言え、必ず寿命を縮められよう！）「使烏戈国之人不留種類者，是吾之大罪也！」（烏戈国の人を絶滅したのは、吾の大罪だ！）

其の少数民族の種族撲滅は文字通り無残な作戦だが、「総設計師」の滅多に見せない涙は、他の戦闘での無慈悲の裏返しに他ならぬ。上記の感嘆を別の角度から読めば、大罪を承知し天罰を覚悟の上での毒手は、国家への至高な忠誠の結果とも思える。織田信長の比叡山焼き討ちと中国の「最後の皇帝」の武力鎮圧の「断而敢行，鬼神避之」、周・朱2総理の「鞠躬尽瘁，死而後已」の精神を前回論じたが、両者は孔明の一身に集まっている。

孟獲は彼を慈父として感化したが、「嚴父・慈母」の対が一般的だ。「右手で握手しながら、左手で相手の顔を殴る」華僑を甘く見た和田一夫は、香港で無邪気な失敗をした<sup>19)</sup>が、礼・兵の両手流は孔明にも遡れる。敵への仁慈は人民への犯罪だという毛の断言も其の国益至上主義と一致するが、喫煙・飲酒を健康の秘訣とした鄧小平や、人を食って生きていると自称した吉田茂の様に、指導者には怪気炎の毒と仁慈心の解毒は同時に必要だ。

『孟子・梁惠王上』には、「始作俑者，其無後乎」（始めて俑[死者の守りに埋めた人形]を作った者は、殉死の悪習を開いた元凶として、天罰で子孫が絶えよう）と有る。毛沢東は59年の廬山会議で、国防相・彭徳懐元帥から「大躍進」の失政を批判され、建国後の2度目の権力の危機に瀕した際に、声涙俱に下る熱弁の中で此の成語を引いた。朝鮮戦争で殉職した其の長男の不幸への同情も混じって、風向きが一遍に彼の方へ傾いた。

諸葛亮の懺悔と涙も部下の心の琴線に触れたが、東洋人はやはり情に弱い面が有る。但し、此の際に私的な感情を絡み合わせたのは、場違い・筋違いと言わざるを得ない。中国人民志願軍総司令部の参謀を務めた毛岸英は、28歳の誕生日の翌日に米軍の爆撃で散ったが、総司令は他ならぬ彭徳懐だから始末が悪い。彭の失脚に毛の私怨も働いていたどうかは天のみ知るが、

「天降大任」「出類拔萃」「不辱君命」：指導者の歴史責任感・使命感（上）（夏）

ソ連帰りの長男が戦火に投身したのは、親の意向も大きかったのだ。

米国帝国主義と其の原子爆弾を「紙老虎」（張り子の虎）として軽蔑した毛は、敵の実力や戦争の危険を甘く見たわけではない。敢えて究極の挑戦をさせたのは、息子を鍛えたい一心からである。彼は建国後、江青との間に出来た唯一人の娘・李訥が学校を卒業した時、好きな格言を4つ贈ったが、1番目が孟子の「天将降大任於斯人也，必先苦其心志，勞其筋骨，餓其體膚，空乏其身，行弘乱其所為，所以動心忍性，曾益其所不能」だ<sup>20</sup>。

ベトナム戦争の時も中国は志願軍を秘密裏派遣したが、平淡な人生を嫌い英雄に成ろうとした李訥は、長兄に倣って戦場へ赴きたいと申し出た。今度は毛は現実主義の態度を取り、当座の仕事に専念するよう命じた。其の「平凡」な職務とは、何と『解放軍報』の編集長であった。此は北京大学を卒業した3年後の68年の事だが、「文革」終了の際の職務は北京市党委員会書記だった<sup>21</sup>。「天子」が子女に与えた大任は、深い意味を含めている。

軍の新聞・『解放軍報』は「文革」中、党中央機関紙・『人民日報』と並ぶ程の重みがあった。政権を奪取し維持する武器は銃と筆だと林彪は言ったが、軍の宣伝媒体は此の2本柱を兼ねる。解放軍の3大指揮中枢は、総参謀部・総政治部・総後勤（軍需）部だが、毛岸青と李訥が置かれた場合は前の2者に当る。戦場との距離や領分の違いは別に、2つの任務の共通点は軍・頭脳だが、孟子の「勞<sub>レ</sub>心者治<sub>レ</sub>人、勞<sub>レ</sub>力者治<sub>レ</sub>於人<sub>ニ</sub>」を思い起す。

中共は無産階級<sup>プロレタリア</sup>革命の観念から、労働者階級を指導的な階級としているが、指導者集団は大知識人・毛を始めとする頭脳労働者であり、肉体労働者は実質的に支配されている。尤も、此の不易の図式が有る一方、理想主義者の毛は中央委員の甥・毛遠新を普通の女工と結婚させ、姪・王海容を化学工場で2年余り労働者を務めさせた。但し、王海容を李訥と同じ北京大学に入れ、後に特殊な地位を与えた事は、彼の帝王根性の現われに思える。

70年代以降の毛は3人の後継者を立てたが、先ず「親密な戦友」・林彪に噛まれてしまい、次に労働者造反派司令・王洪文も期待外れと成り、「老実」<sup>すなわ</sup>が取り柄の華国鋒も短命政権で終わった。「我播下的是龍種，収獲的是跳蚤」（私は龍の種を播いたが、獲れたのは蚤である）という、共産主義運動内部の日和見主義に失望したマルクスの嘆きが、「文革」中に好く引き合いに出されたが、「龍王」・毛の種が実らなかったのは皮肉な事だ。

色々と考えられる理由の中で、後継者を育てる本気の足りなさが最大かと思う。「無産階級<sup>プロレタリア</sup>革命事業」の「後継無人」への危惧から、彼は中央から地方への次世代の指導者の育成を急務として、60年代以降唱え続けたが、其の掛け声と裏腹に自らの権力を手放そうとしなかった。61年に外賓との会見で、国家主席と党の筆頭副主席・劉少奇が自分の後継者だと明言したが、僅か3年後に劉の打倒を決意し<sup>22</sup>、更に2年後其を実行に移した。

彼は例の廬山会議の演説の中で、我々（の独裁）は秦始皇より百倍も凄いと言った。後に別の外賓に対して、我々が必要とする秦始皇は劉少奇であり、私は彼の「附臣」ですと述べた<sup>23</sup>。

林彪を正式に後継者と定める「文革」中の党大会では、彼は突然林を議長団主席に推し、自分は副主席でどうだと言い出し、林を狼狽させてしまった<sup>24)</sup>。2つの「謙遜」は前者は韜晦で後者は忠誠試験だが、俱に<sup>スーパー</sup>超級権力者の特権に基づく超常軌の遊戯だ。

中国の指導者には「男の花道」の発想が無い、という指摘<sup>25)</sup>は間違いない。但し、全て私的な権力欲の故の未練と解すと、問題は矮小化し深層の真相は見えて来ない。天が斯の我に与えた大任は、余人には「勝任」(適任)できまい、という強烈な自信が他者への不信に繋がるわけだ。「我等が時代の最大の人物」・チャーチルを振り返るニクソンは、毛と通じる其の慈父の自負から、歴史の頂点に立つ超大物の宿命的な悲劇に言及した。

彼がチャーチルの息子に其の父の即席演説の巧さを誉めると、相手は笑って答えた。「当たり前ですよ。父は人生の華の時代を、演説の草稿書きと其の暗記に費やしたんですから。」其の時ニクソンが感じたのは、偉人の子に生まれる事の不幸だ。相手は知性に富んだ人物だが、誰でもチャーチルと比べると小さく成ってしまうので、子の場合は二重のハンディギャップだ、と言う<sup>26)</sup>。毛や鄧小平の子供や後継者に就いても、同じ事が言えよう。

此の2人は最終的に序列の低い後輩を次世代のNO. 1に据え、其の型破りな布石は内外を驚かせた。政治的な均衡への配慮や「無事是名馬」<sup>これ</sup>の無難志向が窺えるが、超一流の自分を除けば皆大同小異だ、という心理も有ったかも知れぬ。強い自意識に由る諦観の裏返しとして、自分並みに成らないと老大国の最高指導者は到底務まらぬという強迫観念から、限られた期間中に目一杯、後継者の能力や権威を強引に強化し切ろうと焦りがちだ。

孟門の公孫丑は孔門の弟子を「具体而微」と評したが、『孟子・公孫丑上』には「揠(抜)苗助長」の成語も有る。孟子は「浩然之氣」の修養を怠る事を戒めて、苗の成長の早めたい一心で一本一本引っ張り、其を萎えさせた愚か者の譬え話をした。15年で英国に追いつき、ソ連よりも早く共産主義に入ろうという「大躍進」も、「一步登天」の性急で躓いたのだが、過剰な「出類拔萃」の意識と操作は、常に「拔苗助長」の危険を孕む。

「苗」(人材の卵)に対する突飛な「提拔」(拔擢)も、其の時代に多かった「拔苗助長」だ。林彪事件後の毛は自省からか、白楽天の「試玉要燒三日滿、辨材需待七年期」を引いた。人材か否かの弁別は7年要るが、彼の例の3人の親族は数年後、「文革」の終結と共に不当な高位から転落した。前近代的な「血濃於水」<sup>ちはみずよりこい</sup>「任人唯親」(任用は縁故にのみ由る)等の教訓と別に、「斯人」等への大任の配り方から「天」の願望が読み取れる。

#### 4. 「自強・自卑」の複合体；「礼・兵」の極意

毛が「文革」を起した要因の1つは、首都の党・政が自分の統制から離れた「独立王国」化だ。娘が北京市党委書記に納まった事は、全国の政治的な中心を掌握する其の意志の反映に見

「天降大任」「出類拔萃」「不辱君命」：指導者の歴史責任感・使命感（上）（夏）

えるが、李訥の最高学府への入学は別の拘りと関連する事か。若い頃に北京大学の図書館員を務めた彼は北京占領後、北京図書館で通し番号No. 1の貸出し証を作り、元北大教授の学者で全国政治協商会議議員・梁漱溟を知識人弾圧の最初の標的に選んだ。

『ニクソン回顧録』の日本語版の「訳者前書き」の中に、「誇張なまでの強迫観念と自己主張に満ちたニクソンの言葉」の件が有った<sup>27)</sup>が、当人は強い自我意識と強い意志力を指導者の不可欠な条件に挙げている<sup>28)</sup>。誇り高く見栄<sup>くだり</sup>張りで矛盾も多いチャーチルとマッカーサーの優れた指導力を讃え、彼は其の原動力を探った<sup>29)</sup>が、舌足らずの欠点を逆手に取って演説の魅力<sup>ふし</sup>を磨く若きチャーチルの姿<sup>30)</sup>は、自意識の建設性を示唆する。

毛沢東の「自強・自卑（劣等感）」の表裏一体は、中国の悠久な伝統に因る優越感と落後した故の劣等感の混在と同じく、重層的な複雑系を成す物だが、精神分析で劣等感を表わすcomplexは、ラテン語の「共に折り畳む」意から来、「複合体・合成物」の語義を持つ<sup>31)</sup>。多くの偉人と同じ矛盾を抱えた二重性格の持ち主として、毛は中性的なcomplexの塊と言えようが、其の固定観念（complex）の指向性に注目したい。

「需要は発明の母」と言うが、自卑・自強に因る飢渴精神や抑圧された無意識（complex）は、往々にして需要の源である。毛遠新は軍事人材を育てる<sup>ハルビン</sup>哈爾濱軍事工程学院に入り、後に遼寧省の党・政・軍のNo. 2と成った。林彪も娘を同じ学院に入れ、愛称・「虎」の独り息子に空軍作戦部副部長<sup>や</sup>を遣らせた。正・副統帥の御し易い地方や兵種への配置の節<sup>ふし</sup>も有るが、両者のcomplex（過度の嫌悪・恐怖）も浮き彫りに成る。

瀋陽（奉天）・旅（順）大（連）の在る遼寧省は、日露戦争・日中戦争・国共内戦の主戦場だった。北京の「北大門（玄関）」の一部に当り、朝鮮半島とも地続きの戦略要地なので、朝鮮戦争への出兵も此の地域が主と成った。ニクソンは中国人民志願軍の指揮者を林彪と誤認した<sup>32)</sup>が、敵の統帥の名前の記憶が曖昧だったのは、<sup>ベトナム</sup>越南戦争に較べて痛みが軽かった事か。林が病気を理由に拜命を拒んだのは、「恐美（米）病」の為だと言う。

此の一件で彼は毛の不興を長く買ったが、最強の東北解放軍を率い国内で無敗を誇った彼は、制空権も無い儘で最新鋭の兵器を持つ相手に勝てぬ事を懸念したのだ。息子を空軍の陰の司令に当てた「天降大任於斯人」は、第1号天敵・米国への対抗意識や制空権不在への恐懼の表われとも取れる。彼は毛の対米接近に反発しソ連へ亡命したが、皮肉にも空軍最優秀の操縦士が飛ばす専用機の墜落に困り、夫人・息子と共に異郷で命を亡くした。

毛と周はニクソンとの会談<sup>き</sup>で此の政変劇に然り<sup>け</sup>気無く触れ、相手より遥かに強い国内の反対勢力の存在と、彼等に打ち勝った指導部の意志を伝えた。其の席に王海容が外交部部長（外相）補佐として居たが、英語を専攻させ通訳に育てた毛の先行投資は、最高の舞台で回報<sup>リターン</sup>が得られたわけだ。マルクスの「外国語は人生の武器なり」の教えを実践した其の選択には、連米・抗米戦略と留学経験の無い自分の英語コンプレックスが混じった様だ。

外交官を妃に迎えた平成日本の皇室の先進性が内外で評価されたが、「封建的社會主義」の<sup>そし</sup>誹りを受けた毛の中国でも、鎖国の保守性の反面に時代を先取りする処も多かった。但し、其の革新的・前衛的な一面には、伝統も好く含まれている。王海容は外交部の礼賓司（典儀局）長・次官まで出世したが、中国は賓客に礼を尽くす「礼義之邦」だ。ところが、礼・兵の複合体を表わすかの如く、「賓」の簡略字は「宝」冠と「兵」から成る。

『角川大辞源』を繙いて観ると、「外交」の語義は次の通りである。「①外国との交際・交渉。国と国との交際。国交。〔晋語八〕②国外の人と個人としての交際。また、その付き合いをすること。〔史記・楚世家〕「擯<sup>ひもと</sup>兵外交」③他人との交際。④〔国字〕外交員。」②の出典は嚴密に引けば、「太子居<sup>ひもと</sup>城父擯<sup>ひもと</sup>兵，外交<sup>ひもと</sup>諸侯」（太子が城父〔今の河南・汝州〕に居住し、兵糧を欲しい儘にし、外は諸侯と交際を厚くした），と言う<sup>33</sup>）。

『楚世家』にも出た孟子の遊説先・梁との隣接や、今世紀の国・共2党の「太子党」との符合は興味を引くが、「擯兵・外交」こそ新中国の総合的な国力の強さの秘密だ。共産党中国の外交の本質を象徴する様に、今の唐家璇までの7人の外相は、4人は元軍人で3人は地下黨員だった。戦場での武装闘争にしろ敵占領区での秘密活動にしろ、彼等は修羅場の経験を共有した。情報や計略を重んじる兵家の感覚は、其の第2の共通点と成る。

情報を制す者は天下を制すという発想は孫子と一緒だが、国家の大計なる外交に於いても政策と策略は生命線だ。唐外相と同じ38年生まれ「戦無派」・王海容は、李訥・毛遠新と同じ情報の収集・報告の大任を与えられた。『莊子』の中央の帝・渾沌の話の寓意と矛盾する様だが、権力の頂点に有りがちな情報真空を防ぐよう、毛は彼等を「耳目之官」に用いた。『書経』に出た此の名称は、天子の耳目と成り治世を補佐する官の意味だ。

『孟子』の中の「耳目之官」は、視聴を司る器官を言うが、中央指導者との連絡員を務めた王海容と毛遠新は、「天意・天声」を伝達する手足・喉舌とも成った。外交官と「内交官」の兼務は奇妙に見えるが、通訳の任務でもある意思の疎通と真情の把握は、外交・内政の共通な基礎なのだ。周恩来が中国で受けた「外交家」の誉れは、日本語では外交の大家ではなく、社交の巧みな人を指すが、外交も突き詰めれば国際社会に於ける交際だ。

毛沢東は田中角栄と会うなり、喧嘩（首脳会談）は済みましたかと聞いた。「不打不成交」（喧嘩しないと友人に成れぬ。雨降って地固まる）との觀念から、腹を割って衝突する事は中国では、未永い真の交際の第一歩とされる。日本語の「外交」は「外交員」の略でもあるが、「成交」は「成約する」意も有るから、此の和製漢語（=会社・商店などで、外部を訪問して勧誘・交渉・注文取りなどを担当する者。『広辞苑』）の発想と合う。

「売買不成仁義在」（商談が纏まらなくても仁義〔<sup>よし</sup>誼。和氣〕が残る），という格言も一方に有る。梁恵王の「利」と孟子の「仁義」の対立・統一と重なる様に、「成交・仁義」が同時に中国の外交・内交の目的意識を成す。此の「仁義」は別に礼讓とは限らず、仁義無き争いを辞

「天降大任」「出類拔萃」「不辱君命」：指導者の歴史責任感・使命感(上)(夏)

さぬ自己主張も含む物だ。「求同存異」の方針に基づき双方の食違いを並記した72年中米共同声明も、「打」「和」(①調和。②妥協。引き分け)の傑作だ。

中共の指導者が高度に重視する情報は、政治・外交・軍事・商売・社交に於いて、言語と同じ生存・交流・発展の利器を成す。漢語の「情報」は語源が不明だが、『角川大字源』の「事件の実情の知らせ」に対して、『辞海』は「獲得的他方有関情況以及対其分析研究的結果」(入手した他方の情況、及び其に対する分析・研究の結果)と規定する。「情」の「情況」「感情」、<sup>リクワン</sup>「報」の「報告」「回報」は、色々な組み合わせを可能にする。

其の接点に実情・真情と実意・真意が現われるが、実意・真意と意志・意向・意図の「意」は、『角川大字源』に拠れば、「意符の心(こころ)と音符の音<sup>イン</sup>イ(気が充滿する意=意<sup>イ</sup>)とから成る。抑えられて充滿している心の意。憶<sup>オク</sup>の原字。ひいて、“おもう”意に用いる。一説に、音符は、音<sup>ヨク</sup>イ(おさえられて充滿する意=抑<sup>ヨク</sup>)という。」正に孟子の「塞滿天地之間」の「氣」や、抑圧された無意識の complex と通じる。

ニクソンは指導者の沈黙の重要性を説いたが、左様な含みを持つ「音」の「帝・口」の字形は、指導者の言語表現の問題を提起する。頂峰会議は孤独な人間同士の本音の吐露の場だと言われるが、哲学談義や愚痴等の「閑話」に徹した毛・ニクソン会談は、欲求の追求と欲求不満の解消を兼ねた其の極意の手本だ。視聴や発声の能力が低下した「中央之帝」は、「耳目之官」の両義を超えた心眼・心耳を以て、「心声」を述べたわけである。

鄧小平は香港返還に就いてサッチャー首相に雷を落とし、周恩来は中米首脳会談で小技を弄じず、譲歩の限界を最初に示して置いた<sup>34</sup>。毛沢東は「戦略上藐視敵人、戦術上重視敵人」と言うが、小乗的な立場では「底牌」・本心を見せぬとしても、大乘的な立場では底意・真情の表示が要る。其の真情は友好・懐柔とは限らず、敵に勝つ目的意識や気概も含まれる。「情報」の字面を擬<sup>もじ</sup>って言えば、礼・兵の成功は情に報じられる処が多い。

国交回復秘密交渉の第1回会談の冒頭、キッシンジャー国家安全保障特別補佐官は元ハーバート大教授らしく、用意された原稿を読み上げた。「1874年、米国の商船・《中国皇后丸》がニューヨークから出発し、大西洋を横断し、喜望峰を通り、8月28日に中国広州の黄埔港に到着し、米中関係の序幕を開けた……」という風に始まり、最後に中国の国際社会への再帰と建設的な役割の発揮への期待、米大統領の訪中の希望を表明した。

氣宇壮大な歴史の回顧と理路整然な言説の展開は、本来は中国人好みで中国でも常套の表現手段と成るが、周総理と葉劍英元帥は其の前口上を我慢して拝聴したのだ<sup>35</sup>。漸く枕言葉が終わり、キッシンジャーは分厚い資料を離して、悠久な歴史と美しい国土を持つ中国は我々には神秘的な国です、<sup>な</sup>と言い出した。熟れさえすれば神秘ではない事に気付かれるでしょう、と周は応えたが、此の生の会話で心の琴線が触れ合い、交渉が軌道に乗った。

## 5. 「最後の吼声」の決意・底意

2日間しか無い時間の制限に因って、悠長な話法に付き合ってもらえぬ事情も想像できる。中国人は「欲速則不達」の考えを持ち、百年単位の発想や「<sup>グローバル</sup>全球眼光」に富むが、97年前の大西洋 喜望峰経由の「万里长征」から切り出すのは、気を回し過ぎた「誘弯抹角」(曲がりくねった道を歩く。遠回しに)だ。朱総理は日本の経済人等との会見で、似た理由で苛立っていると云うが、迂回・闊達と迂闊は紙一重の差で隣り合わせる物だ。

彼等は中国の文化の伝統や発展の可能性を礼賛し、社交辞令に止まり実務の話はなかなか出さない。翻って思えば、梁恵王の「不遠千里而來、亦将有以利吾国乎？」は、君主の極く自然な関心事である。孟子の「何必言利」と恵王の言わば「必言利」は、中国の理想主義と現実主義の二極を成す。ニクソンの例の「地に足が着く」は、中国流で「脚踏实地」と云うが、宋の邵雍の司馬光評が出典の此の成語は、中共の「工作作风」とも成った。

政策決定の際の「務虚」(思想統一)も、「落實」(実現)の為である。分厚い資料を頼るキッシンジャーに対して、周は1枚のメモを手元に置いただけだ<sup>36</sup>。彼も膨大な裏付けが有ったはずだが、其の「<sup>むねにせいちくあり</sup>胸有成竹」の軒昂は、readerに甘んじぬ姿勢や、国際関係即「人際」(人間)関係という哲学ををを表わした。毛とニクソンの哲学談義も「空対空導弾」ではなく、賓客の例の最後の真情の吐露の様に、高次の真実に落ち着いたのだ。

田中首相の「ご迷惑」発言が周総理に抗議され、国交回復の交渉が暗礁に乗り上げた処、妥結の見通しを樂觀していた日本側は悲観に転じた。大平外相は食事の際に箸に手を付けず、国民が望む国交正常化の目標が達成できねば帰国するわけには行かぬと言った。政治的全責任は総理の俺に在るから心配するな、君等大学出はこんな修羅場に成ると駄目だ、と角栄は一喝したが、じゃあ明日からの交渉をどうするのだ、と大平は憤然と応酬した。

会談の決裂と内部の不和の危機の中で、其の時2人は次の禅問答を交わした。「なあ、君は越後から東京に出て来る時に、総理大臣に成れると思ったかい。」「冗談じゃない。越後の田舎じゃ食えんからなあ。」「俺もそうだ。讃岐の田舎では食えんから、東京に出て来たんだ。」<sup>37</sup>。本心の吐露は心機一転に繋がったが、足が地に着き民衆から出て歴史に結び付けられた2人は、突破口を作り責任を果たそうというニクソンの志向と通じる。

其の使命感には「天降大任於斯人」の自負も読み取れるが、中国の「天皇」の「天声」と重なって聞こえる。毛はニクソンの『<sup>むっつのきき</sup>六次危機』を誉めたが、彼が経験した党内路線闘争の危機だけでも、党主席就任後の41年の間に其ぐらい有った。彼は建国10、21年目に、2人の国防相 - 彭徳懐・林彪と対立した時、こんな殺し文句を放った。(仮に敗けても)大した事は無い、軍を率いて農村根拠地に戻り、再び遊撃戦をやれば良い、と。

下の士は白で人を殺し、中と上の士は<sup>それぞれ</sup>其々言葉と筆で人を殺す、と古人は言う<sup>38</sup>。杖・刀・

「天降大任」「出類拔萃」「不辱君命」：指導者の歴史責任感・使命感（上）（夏）

政治に由る殺人に関する孟子の説<sup>39)</sup>と関わって、89年の天安門事件の銃に由る軍の鎮圧に対して、毛政権末期の76年の其では民兵の棍棒が使われたが、毛の林彪排除の利器は専ら言葉と文章だ。彼は列国遊説の伝統に沿い、南方巡視で各地の諸侯を取り入った。「寸鉄殺人」（警語で人の急所を衝く）と言うが、例の伝家の宝刀の殺し文句も繰り返した。

武力の裏付けが有ってこそ効果を持ち、流血に伴わぬ肅清が出来たのは言うまでもないが、其の恫喝は半分は本心だったろう。彼は林彪の仕掛けで本意に神格化された事を、「逼上梁山」（迫られて梁山泊<sup>のぼ</sup>に上る）の熟語で形容した。中華人民共和国国歌・『義勇軍行進曲』の歌詞に、「被迫着發出最後の吼声」（迫られて最後の雄叫びを発する）と有るが、毛の「最後の吼声」の「上山打遊撃」は、「逼上梁山」と共に其の原点なのだ。

「草莽英雄」の物語・『水滸伝』が好きな彼は、マルクス・レーニン主義の原理は「造反有理」の一言に尽きると断じた。曾て彼は農村を根拠地としていた事で党内の一部から、「山溝里的馬列主義」（山奥のマルクス・レーニン主義）と貶された。ニクソンも其の「草莽寒門」（山村の貧しい家の出身）に触れたが、『<sup>インターナショナル</sup>国際歌』の劈頭の雄叫びの中国語は、「起来，飢寒交迫的奴隸」（立ち上げられ、飢寒に迫られ〔苛まれ〕た奴隸たちよ）と言う。

米ソの優劣を巡る59年のニクソンとフルチョフの「厨房論争」は、周恩来が前者を持ち上げる材料にも成った。相手の胸に指を突き付けて激突し合う其の一齣ほど有名ではないが、2日後に彼の米国副大統領は、ソ共書記長の執務室で再び挑発を受けた。米国議会が可決した恒例の『被抑圧国家支持決議』に就いて、東道主は刺す様な目で賓客を見て怒鳴った。「シヨンペンだ。湯気の立った馬のシヨンペンだ。此以上、臭い物は無い！」

ニクソンは開き直って正面から相手を見詰め、声を荒げもせずに言い返した。「書記長は言い違いをされた様です。馬の小便より臭い物が有ります。其は豚の小便です。」若い頃に豚追いをしていたフルチョフは、太陽穴の血管が破裂するかの様に見えたが、次の瞬間にっこり笑って話題を変えた。指導者の遣り取りは時には此の通り、正真正銘の生臭い物に成るが、「歯には歯」の心・技・体が無いと、牙を剥かれた場合は吞まれてしまう。

ニクソンが「野牛」と名付けた其の北極熊の乱暴・不羈は、<sup>こんにゃく</sup>蒟蒻が特産の土地から生まれ気配りが得意な今の日本の「鈍牛」首相と対蹠を成すが、敵の怪気炎を一発で鎮めたニクソンの<sup>せりふ</sup>台詞は、基礎的な体験から本能的に発した物だ。子供の時に馬糞が肥料に成る処を見ており、或る時、近所の農家が豚の糞を代用したが、其の臭さは今だに覚えていたのだ<sup>40)</sup>。彼は相手に憎悪と親近感を同時に抱いたが、馬が合う事の秘密は其の辺にも有る。

ニクソンは毛沢東の多岐放縦と蒋介石の整理整頓を較べ、毛の書は自由闊達で規矩に馴染まず、蔣の書は毅然として一点一画を揺るがせにしない、と述べた<sup>41)</sup>。鄧小平の書も「一筆不苟」の几帳面さが特徴だが、彼の言語表現には蒋介石と同じく、「不登大雅之堂」の部分も有った。人格の謹厳さで名高い劉少奇主席も、仕事をせぬ癖に権力の座に居坐る傾向を、「占着茅房不

拉屎」(糞をしないのに便所を塞ぐ)という尾籠な熟語を使った。

鄧小平が趙紫陽総書記を切った後の噂に抛れば、彼は「儂と同じ渡瓶で小便をしないとは思わなかった」と言っ、自分への二心を見損なった事を悔しがったそう。周恩来や彼の死後に流布された「遺書」と同様、デマと受け止めた方が順当だろうが、左様な言い回しが出回った下地に注目すべ。 「文革」中に巷で広く信じられていた「毛主席未発表詩詞」群も、少数ながら本物が入っていたし、大半を占める偽物も毛の風格を帯びた物だ。

後で判明した確信犯でない「偽作者」は、文学者・郭沫若の薫陶を受けた研究者の卵だったが、振り返って観れば、毛の詩作との差は正に「具体而微」の通り、偉人の輪郭を具備しつつも規模が微小な事だ。其の最大な不足は神気・文采よりも、生臭い・血腥い覇気と迫力に在ろう。例えば、『念奴嬌・鳥児問答』を結ぶ「不須放屁，試看天地翻覆」(放屁をするな、天地の翻覆を見てみよ)は、余人には思いも寄らぬ奇想天外な一喝だ。

周恩来逝去の直前の76年元旦に公表された此の詞は、フルチョフへの諷刺を込めて65年に書いたのだ。漢語の品格を損なうとして「放屁」の件に台湾側から文句が出たが、毛が勝って官軍と成り蔣が敗けて賊軍と成ったのは、品と無関係の実力の重みを示した。最近、金日正総書記は食糧難を無視して人工衛星への投資を宣言したが、約40年前の毛の核開発に賭けた同じ意気込みと比べれば、やはり「小巫」と「大巫」の差が見られる。

中村正軌の小説・『貧者の核爆弾』(文芸春秋、1990)で登場した北アフリカテロリズム国家の元首は、曾て中国に使者を派遣し原子爆弾の購入を申し入れた。周恩来は武器を輸出せぬ原則を持ち出して断ったが、其の「アラブの狂犬」も負ける強堅・強権で知られる毛も、原子爆弾の見本の提供をフルチョフに要請し拒否された事が有る。悔しい毛は内部の会議で、ズボンを質屋に入れてでも原爆の開発を成功させようと檄を飛ばした。

三文にも成らぬズボンを抵当に資金を作るとは、究極の発憤の意思表示である。ズボンを無くす事は飢寒の徴と共に、「遮羞布」と羞恥心を殴り捨てる意味も有る。最近世間を騒がせた核技術流出の疑惑と別の話だが、中国では「男盗女娼」が破廉恥罪の極み付けとされる一方、「笑貧不笑娼」(娼婦を笑わぬが貧困を笑う)という熟語も有る。赤貧を貶す侮辱語の「窮光蛋」は、無一文の果てに一物(蛋=金玉)が露出する様の含みも有る。

司馬遷が中国人の発憤精神の最大な元祖と成ったのは、其の一物まで去勢された事にも因る。彼の屈辱と「悲涼」心境は察する余り有るが、核保護の傘下に甘んじる去勢・不能を避けたいからこそ、毛は其の悲壮な見立てをした。自らを追い詰めた必死な決意のお陰で、共産党中国は最短時間の開発を経て、米・ソ・英・仏に次ぐ核保有国と成った。ニクソンは毛をドゴールと並ぶ意志の最強な政治家と推したが、此の事実も証明と成ろう。

『LEADERS』の終章・『指導者の資格に就いて』の中で、例の権謀と誠実の千回の交錯の秘訣に続き、ドゴールの次の論断も引かれた。「行動の人は相当な自我意識と誇りと非情

「天降大任」「出類拔萃」「不辱君命」：指導者の歴史責任感・使命感(上)(夏)  
と老獺を持っているが、其に由り偉大な目的を達する事が出来れば、全ては宥<sup>ゆる</sup>されるばかりか、却って称賛される。」ニクソンは毛沢東やフルチョフを、「自分の政治の為に民衆が苦しんでも平気な人」と断じた<sup>42)</sup>が、此の基準からすれば別の観方も可能だ。

(以下次号)

99. 5. 8 (NATO軍がユーゴ駐在中国大使館を爆撃し死傷者を出した日)

#### 註

- 1) 夏剛 『「生於憂患，死於安樂」：当代日中指導者の緊張感の比較』、『立命館国際研究』11巻3号，1999年3月，107～127頁。
- 2) 西北師範学院中文系編 『漢語成語詞典』，上海教育出版社，1987年，450頁。
- 3) 上山春平 『神々の体系 - 深層文化の試掘』，中公新書，1972年，53～55頁。
- 4) 羅貫中 『三国演義』，立間祥介訳，『中国古典文学大系』26巻，平凡社，1968年，379頁。
- 5) 北京外国語大学教授・呉青の言。『読売新聞』1999年4月14日。
- 6) 10) 11) 12) 14) 15) 16) 18) 26) 28) 29) 30) 32) 41) 42) リチャード・ニクソン 『指導者とは』，徳岡孝夫訳，文芸春秋，1986年(原題『LEADERS』，原典1982年)，46，253～254，365，254，同，253，365，28～29，369，371，28，114，197，270，362頁。
- 7) 『華陽国志・劉後主志』の記載。沈伯俊・譚良嘯 『三国演義大事典』，立間祥介他訳，潮出版社，1996年(原典1989年)，133頁。
- 8) 青野・方雷 『鄧小平在1976年』上，春風文芸出版社，1993年，48頁。
- 9) 27) 『ニクソン回顧録① 栄光の日々』，松尾文夫・齋田一路訳，小学館，1978年(原典同)，331～332，9頁。
- 13) 阮銘 『中国的転変 - 胡耀邦と鄧小平』，鈴木博訳，現代教養文庫，1993年(原典1991年)，143～145頁。
- 17) 34) 35) 36) 陳敦徳 『毛沢東・尼克松在1972』，崑崙出版社，1988年，304，241，187～188，186頁。
- 19) 加藤鉦 『ヤオハン 無邪気な失敗』，日本経済新聞社，1997年，85頁。
- 20) 21) 22) 23) 曉峰・明軍主編 『毛沢東之謎』，中国人民大学出版社，1992年，188，179，94～97，264頁。
- 24) 席宣・金春明 『「文化大革命」簡史』，岸田五郎他訳，中央公論社，1998年(原典1996年)，255～256頁。
- 25) 伴野朗 『上海 遥かなり』，実業之日本社，1992年，290頁。
- 31) 小稲義男他編 『新英和中辞典』第5版，研究社，1985年，334頁。
- 33) 司馬遷著・吉田賢抗訳註 『史記六(世家)』，明治書院 『新釈漢文大系』86巻，1979年，441～442頁。
- 37) NHK取材班 『周恩来の決断 - 日中国交正常化はこうして実現した』，日本放送出版協会，1993年，159～160頁。
- 38) [梁] 蕭繹 『金樓子・雜記篇13上』巻6，2頁。大雄 棋尼 『中国智術中的知慧』，浙江人民出版社，

1992, 6 頁。

39)「梁惠曰：“寡人願安承<sub>レ</sub>教。”孟子对曰：“殺<sub>レ</sub>人以挺與<sub>レ</sub>刀有<sub>レ</sub>以異<sub>レ</sub>乎？”曰：“無<sub>レ</sub>以異<sub>レ</sub>也。”  
“以<sub>レ</sub>刀與<sub>レ</sub>政，有<sub>レ</sub>以異<sub>レ</sub>乎？”曰：“無<sub>レ</sub>以異<sub>レ</sub>也。”(『孟子・梁惠王章句上』)

其の他，日本・中国の多くの新聞・雑誌の記事を参考にした。

( Xia Gang , 本学部助教授 )